

## 池内靖子教授 略歴と業績

### 1. 略 歴

1947年2月10日	長崎県に生まれる
1969年3月	奈良女子大学文学部英語英文学科卒業
1971年3月	奈良女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了（文学修士）
1969年4月～1973年3月	大阪女学院短期大学英語非常勤講師
1973年4月～1976年3月	嵯峨美術短期大学英語非常勤講師
1974年4月～1978年3月	立命館大学産業社会学部英語非常勤講師
1976年4月～1978年3月	同志社大学英語非常勤講師
1978年4月	立命館大学産業社会学部助教授
1983年9月～1984年8月	フルブライト奨学金（Faculty Development Fellowship）を得て Yale University の School of Drama で客員研究員
1991年4月	立命館大学産業社会学部教授
1992年9月～1993年4月	University of British Columbia (UBC) の文化学科で、立命館-UBC ジョイント・アカデミックプログラムとして、“Canada, Japan and the Pacific: Cultural Studies” コース担当
2006年9月～2007年9月	城西国際大学大学院「女性学特別講義」集中講義非常勤講師
2012年3月	立命館大学定年退職
2012年4月	立命館大学特別任用教授、名誉教授

### (主な学内役職歴)

産業社会学部学生主事（1989年4月～1990年3月）
国際センター副所長（1990年10月～1992年3月）
UBC-JP 教務主任（1992年4月～1993年4月）
産業社会学部主事（1995年4月～1996年3月）
言語教育センター英語部会長（2008年4月～2009年3月）

### 2. 専門分野 アメリカ演劇、日本近現代演劇、パフォーマンス、身体表現論、ジェンダー論

研究課題 現代演劇とパフォーマンス・アート

所属学会 日本演劇学会、Performance Studies International (PSi)、アメリカ学会 (The Japanese Association for American Studies)、Member of the Editorial Committee

for the *Asian Journal of Women's Studies*, Ewha Woman's University Press. Seoul, Korea (from 2000-2007)

### 3. 主な研究業績

#### 著 書

(単 著)

- 1) 『フェミニズムと現代演劇』 田畑書店, 総243頁, 1994年6月
- 2) 『女優の誕生と終焉 パフォーマンスとジェンダー』 平凡社, 総351頁, 2008年3月

(共 著)

- 3) 「母性神話の破綻—『奇妙な幕間狂言』論」『現代演劇としてのユージン・オニール』法政大学第13回国際シンポジウム, 黒川欣映編 法政大学出版局, pp. 61-99, 1990年3月
- 4) 「シアター／パフォーマンスとジェンダー」渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社, pp. 298-316, 1997年9月
- 5) 「ポストコロニアル・フェミニストの映像テキスト—ビヨン・ヨンジュとトリン・T・ミンハを中心に」(西川長夫・姜尚中・西成彦編『20世紀をいかに越えるか』) 平凡社, pp. 386-410, 2000年6月
- 6) “Kishida Rio’s *Wasurenagusa* (Forget-Me-Not): A Japanese Version of Frank Wedekind’s *Lulu*” Scholz-Cionca & Leiter (eds.), *Japanese Theatre and the International Stage*. Leiden, Boston, Köln: Brill, pp. 285-311, 2001年12月
- 7) “Performances of Masculinity in Angura Theatre: Suzuki Tadashi on the Actress and Satô Makoto’s *Abe Sada’s Dogs*” in Edward Scheer and Peter Eckersall (eds.), *The Ends of the 60s: Performance, Media and Contemporary Culture*, Selected Essays from *Performance Paradigm: A Journal of Performance and Contemporary Culture Issues 1 and 2*. (Published by Faculty of Arts and Social Sciences, UNSW and Performance Paradigm), pp. 8-27, 2006年8月
- 8) 「彼女の語りと身体—琴仙姫の映像作品をめぐって」李静和編『残傷の音—「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店, pp. 238-275, 2009年6月
- 9) “Counter-Narrativity and Corporeality in Kishida Rio’s *Ito Jigoku*.” Markus Hallenslebe, ed., *Performative Body Spaces: Corporeal Topographies in Literature and the Visual Arts*. Amsterdam-NewYork: Rodopi, pp. 105-115, 2010年11月

(共編著)

- 10) 姫岡・池内・中川・岡野編『労働のジェンダー化 ゆらぐ労働とアイデンティティ』平凡社, 総343頁, 2005年3月
- 11) 池内靖子, 西成彦編『異郷の身体—テレサ・ハッキョン・チャをめぐって』人文書院, 総287頁, 2006年2月

(翻 訳)

- 12) ジュディス・E・バーロウ編『アメリカ女性劇集：1900-1930』新水社，総268頁，1988年6月
- 13) アリシア・S・オストライカー著『言葉を盗む女たち』土曜美術社，総455頁，1990年9月
- 14) テレサ・ハッキョン・チャ著『ディクテ—韓国系アメリカ人女性アーティストによる自伝的エクリチュール』青土社，総211頁，2003年6月

## 論 文

- 1) 「『ハロルド御主人様』と『その使用人たち』のもうひとつの関係」『立命館大学外国文学研究』第69号，pp. 85-101，1985年12月
- 2) 「現代演劇における革新 黒い女たちのためのシャンゲの〈舞踏詩〉」『立命館大学外国文学研究』第85号，pp. 1-17，1989年3月
- 3) 「『クラウド・ナイン』におけるセクシュアル・ポリティクス」『立命館言語文化研究』第2巻第5・6号合併，pp. 163-191，1991年3月
- 4) 「M. バタフライとマダム・バタフライ：オリエンタリズムとジェンダーの(脱)構築」『立命館産業社会論集』第33巻1号，pp. 101-114，1997年9月
- 5) 「ポスト・コロニアリズムとジェンダー—〈証言・記憶・表象〉をめぐる」ジェンダー・スタディズ研究特集『立命館言語文化研究』第10巻第1号「序」pp. 1-4，「ポストコロニアルフェミニスト映像テキスト—『ナヌムの家II』」pp. 45-69，1998年9月
- 6) 「ポスト・コロニアリズムとジェンダー—ビョン・ヨンジュとトリン・T・ミンハの映像テキストを読む」〔英語版〕“Postcolonialism and Gender — A Reading of the Filmic Texts of Byun Young-Joo and Trinh T. Minh-ha—”『立命館言語文化研究』第11巻1号，1999年9月
- 7) “The ‘Actress’ and Japanese Modernity: Subject, Body, Gaze.” *Asian Journal of Women’s Studies*, by the Asian Center for Women’s Studies, Ewha Woman’s University Press. Vol. 6, no. 1, pp. 11-46, 2000年3月
- 8) 「『女優』と日本の近代：主体・身体・まなざし—松井須磨子を中心に」『立命館国際研究』12巻3号，pp. 101-122，2000年3月
- 9) 「シアター／パフォーマンスとジェンダー—第3回アジア女性演劇会議に参加して」『現代思想』青土社 2001年5月号 (vol. 29-6)，pp. 176-191，2001年5月
- 10) 「岸田理生の『忘れな草』—日本版“ルル”/ファミ・ファタールの舞台」『アート・リサーチ』立命館大学アート・リサーチセンター紀要，創刊号，pp. 91-98，2001年3月
- 11) 「近代日本における『オセロ』の翻案劇：帝国のまなざしと擬態」『アート・リサーチ』立命館大学アート・リサーチセンター紀要3号，pp. 137-150，2003年3月
- 12) 「近代と女性の表象—日本における『人形の家』上演と批評言説」『演劇人』第14号 (財)

舞台芸術財団演劇人会議, pp. 80-88, 2003年11月

- 13) 「境界に立つということ—テレサ・ハッキョン・チャの『ディクテ』を読む」『現代思想』32(7), pp. 204-219, 2004年6月
- 14) “Translation of / Postscript for Theresa Hak Kyung Cha’s *Dictee*.” *Understanding Theresa Hak Kyung Cha*. Seoul: Ssamziespace, pp. 60-68, 2004年7月
- 15) 「テキスト『ディクテ』の舞台化—韓国の劇団ミュトスの公演とシンポジウムから」『舞台芸術』(6) 京都造形芸術大学舞台芸術研究センター, pp. 204-212, 2004年7月
- 16) 「アングラ演劇におけるマスキュリニティのパフォーマンス—鈴木忠志の「女優論」と佐藤信の「阿部定」劇」『立命館言語文化研究』第1巻4号, pp. 239-255, 2006年3月
- 17) 「『殺人の追憶』における「不気味な、置き換えられた三角形」」『アート・リサーチ』立命館大学アート・リサーチセンター, Vol. 6, pp. 81-94, 2006年6月
- 18) “The ‘Uncanny, Displaced Triangles’ in *Memories of Murder*.” *Memories of Murder* (韓国語版) (New Wave of Korea Cinema series) Seoul: SaeMulKyul, pp. 81-126, 2006年8月
- 19) 「『糸地獄』における対抗的語りと身体性—「母殺し」を超えて」『シアターアーツ』28 (2006秋号, pp. 58-63) (発行: AICT [国際演劇評論家協会] 日本センター, 発売: 晩成書房) 2006年10月
- 20) 「アイデンティティ (脱) 構築の迷路—寺山修司の『田園に死す』を中心に」『立命館言語文化研究』18巻2号, pp. 31-43, 2006年11月

### 翻訳と解説

- 1) 「批評・解釈の政治学」テレサ・ハッキョン・チャの回顧展『観客の夢』(コンスタンス・M・ルウォレン著「テレサ・ハッキョン・チャー—彼女の時代と場所」〔共訳: 池内靖子・北原恵〕の解説として)『インパクト』136号, インパクト出版会, pp. 114-118, 2003年9月
- 2) ダイアン・リチャードソン著「セクシュアリティの変容?—エイリアンの他者から善良なゲイ市民へ」木本喜美子・貴堂嘉之編『ジェンダーと社会—男性史・軍隊・セクシュアリティ』の第8章(池内単独訳)旬報社, pp. 193-214, 2010年6月

### シンポジウム記録

- 1) 「芸術表現に関する国際学術交流シンポジウムについて」「ヴィジュアル・アーツの可能性: ポスト植民地主義とジェンダー—ビョン・ヨンジュ (映画監督), 嶋田美子 (アーティスト)」『立命館産業社会論集』第32巻第4号, 1997年12月
- 2) 「他者の言語, 異境の身体『ディクテ』を読む/観る」パネリスト: 西成彦+池内靖子+チヨン・ヨンドウ+高山明+松田正隆+八角聡仁, 『舞台芸術15』京都造形芸術大学舞台芸術研究センター, pp. 4-31, 2009年4月

## 劇 評

「アイルランドで見た『従軍慰安婦』についてのパフォーマンス」『現代思想』vol. 25-10, pp. 72-77, 1997年9月

## 映 画 評

「ジェーン・ジン・カイセン監督の映画『女と孤児と虎』——抗争の場をひらく声と語り」『インパクション』180号, インパクト出版会, pp. 206-210, 2011年6月

## 教 科 書

『改訂版 21世紀のジェンダー論』（池内靖子, 二宮周平, 姫岡とし子と共編著）晃洋書房, 総242頁（初版：晃洋書房, 総220頁, 1999年11月）2004年7月

## 口 頭 発 表

- 1) “O’Neill and America: A Shared Adolescence,” ユージン・オニール学会主催第1回国際会議, アメリカ, ボストン, サフォーク大学, 1984年3月
- 2) 「“アソル・フガードの *The Road to Mecca* : 女たちの光と闇」日本演劇学会1984年春季大会, 東京, 1985年5月
- 3) “Gambling Their Souls Away: The Survival Game in *Hugie*,” ユージン・オニール学会主催第2回国際会議, アメリカ, ボストン, サフォーク大学, 1986年3月
- 4) “Two Popular O’Neill Plays Staged in Japan: *Ah, Wilderness!* and *Desire under the Elms*” 国際シンポジウム ‘Eugene O’Neill: World Playwright.’ 共催：中国南京大学, ユージン・オニール学会, 中国南京大学, 1988年6月6日～6月14日
- 5) パネリスト報告「オニール劇におけるアメリカ神話の批判的構造」法政大学第13回国際シンポジウム「現代演劇としてのユージン・オニール」, 法政大学, 1988年7月
- 6) キーノート・スピーチ「なぜ私たちはアジア女性演劇人として集まるのか」第1回アジア女性演劇会議主催京都集会, 1992年10月2日
- 7) “M. Butterfly and Madame Butterfly: (De)construction of Orientalism and Gender,” 「ポストコロニアリティとジェンダー」フォーラム アジア女性学研究中心主催, 韓国ソウル梨花女子大, 1997年5月15日
- 8) “Kishida Rio’s Wasurenagusa: A Japanese Version of Frank Wedekind’s ‘Lulu’ Cycle,” 国際シンポジウム「世界の中の日本演劇」, ドイツ, ミュンヘン大学, 1998年5月19日～5月22日
- 9) パネル・コーディネーターとして報告「ポスト・コロニアリズムとジェンダー——ビヨン・ヨンジュとトリン・T・ミンハの映像テキストを読む」立命館大学国際言語文化研究所10周年記念国際シンポジウム, 立命館大学, 1998年11月2日～11月4日

- 10) ゲスト・スピーカー報告 “The ‘Actress’ and Japanese Modernity: Subject, Body, Gaze.”  
国際シンポジウム “Feminist Analyses on Modernity in East Asia: China, Japan and Korea.” 韓国ソウル梨花女子大, 1999年6月11日～6月12日
- 11) アジア女性演劇会議の招待でインドの劇団による『キッチン・カタ』の公演と関連シンポジウム「女性と表現」におけるコーディネーター, 東京世田谷パブリックシアター会議室, 2002年5月25日
- 12) 国際パフォーマンス学会報告 “Mimicry and the Imperial Gaze: A Modern Japanese Adaptation of *Othello*,” 獨協インターナショナル・フォーラム「パフォーマンス：抵抗、変容と文化の混淆」, 獨協大学, 2002年12月14日
- 13) フォーラム報告 “The Japanese Version of *Othello* and the Japanese Colonial Rule in Taiwan.” アメリカ, シアトル, シンプソン・センター ワシントン大学, 2003年2月26日
- 14) ゲスト・スピーカー報告 “Translation of / Postscript for Theresa Hak Kyung Cha’s *Dictée*” 国際シンポジウム “Understanding Theresa Hak Kyung Cha,” コリアン・アメリカンのアーティスト, テレサ・ハッキョン・チャの展覧会『観客の夢』展関連企画, 韓国ソウルのサムジ・スペース, 2003年9月5日
- 15) パネリスト兼通訳「2003京都ビエンナーレ」オープニング・シンポジウム「文化的複数性の中のスローネス」〔他のパネリスト：イラン系アメリカ人女性アーティスト, ザラ・ウシマンド（詩人, 舞台演出家）, タミコ・ティール（ヴィジュアル・アーティスト）, トリン・T・ミンハ（映像作家）〕, 京都芸術センター, 2003年10月4日
- 16) 「テレサ・ハッキョン・チャの表現：言語・映像・身体」連続講座「国民国家と多文化社会」第14シリーズ「コリアン・ディアスポラ―交差する多様な表現」立命館大学国際言語文化研究所主催, 立命館大学, 2003年11月14日
- 17) ゲスト・スピーカー報告「マッドウイメン／日本～韓国のフェミニスト・フォトグラファー, パク・ヨンスクの仕事を起点に～」シンポジウム 大阪市アーツアポリア非営利共催事業, 大阪南港, 2004年2月1日
- 18) ゲスト・スピーカー報告「テレサ・ハッキョン・チャの移行風景」, 「Borderline Cases展」（東京恵比寿のA.R.T 6月～7月開催）関連シンポジウム「Co-responses on the Borderline―境界線上に立って, 互いに応答する／日韓女性のアートと心」, 慶應義塾大学）慶應義塾大学21世紀COE人文科学研究拠点主催（表象B「芸術学」班）, Borderline Cases実行委員会, 2004年6月27日
- 19) トーク「Orientity展」（コリアン・ディアスポラ・アーティスト作品展覧会に関連するトーク）, 京都芸術センター, 2004年9月26日
- 20) パネリストとして報告 “The Politics of Gender and Sexuality in the Underground Theatre Movement in Japan” (2005-06-20) 「Women’s Worlds 2005」世界女性会議, 韓国ソウル梨花女子大, 2005年6月19日～6月25日

- 21) ゲスト・スピーカー報告, シンポジウム 『「戦争」の時代と演劇』日本劇作家大会2005長久手大会, 愛知長久手, 2005年9月1日
- 22) ゲスト・スピーカー報告「京都演劇計画2005」関連シンポジウム「他者の身体と言語」, 京都芸術センター 10月23日, 「*from DICTEE*」というタイトルの演劇公演(京都芸術センター関連企画) 2005年10月19日～10月28日
- 23) 「日本で『ディクテ』を読む」〈ジェンダー研究の日韓交流シンポジウム—女性の表象と国際移動〉共催: 立命館大学国際言語文化研究所, 韓国梨花女子大女性学センター, 立命館大学, 2006年1月19日
- 24) シンポジウム報告「アイデンティティ(脱)構築の迷路—寺山修司の『田園に死す』を中心に」冬季シンポジウム「映画・女性・権力—ジェンダーと視覚性—」立命館大学国際言語文化研究所主催「ジェンダー・スタディーズ」研究会と「日本文化と視覚性」研究会共催, 立命館大学, 2006年2月21日
- 25) パネリストとして報告 “Staging a Korean Diasporic Artist’s Text, *Dictée* at an Alternative Space in Kyoto” in a Panel Titled: Producing Public spaces for Creative and Critical Dialogue: Performance as a Site for Post-Colonial and Gender-Critique in Japan, for the Performance Studies International Conference no 12. (PSi #12: Performing Rights), クイーンメアリー, ロンドン大学で開催された国際パフォーマンス学会, 2006年6月14日～6月18日
- 26) パネリストとして報告 “Feminist aesthetics in Kishida Rio’s theatre and film texts,” in a Panel: Gender, ‘Globalisation and Performance: Ono Yoko, Kishida Rio and Mori Mariko,’ under the 2006 conference theme, ‘TWENTY-FIRST CENTURY FEMINISMS,’ for the AUSTRALIAN WOMEN’S STUDIES ASSOCIATION (AWSA), クイーンズランド大学, モナシュ大学共催で開催されたオーストラリア女性学大会(メルボルン), 2006年7月9日～7月12日
- 27) シンポジウム報告「韓国映画の〈女性〉像」〔司会: 富田美香, その他の出演者: 文素<sup>ムンソリ</sup>リ(韓国の女優), 李<sup>イ</sup>庸<sup>ヨン</sup>観<sup>ガン</sup>(釜山国際映画祭副委員長), 黄<sup>ファン</sup>盛<sup>ソン</sup>彬<sup>ビン</sup>氏(立命館大学)〕第1回 RiCKS 韓国映画フェスティバル, 公開上映とシンポ, 総合テーマ「韓国映画の魅力—女優ムンソリの世界」主催: 立命館大学コリア研究センター, 共催: 立命館大学映像学部設置準備委員会, 立命館大学, 2006年10月24日
- 28) シンポジウム報告「帝国のロマンス「三態」—『マダム・バタフライ』『M・バタフライ』『ミス・サイゴン』お茶の水女子大のCOE「ジェンダー研究のフロンティア」Project D(理論構築と文化表象), 韓国梨花女子大学共催シンポジウム「文化表象の政治学—日韓女性史の再解釈」, お茶の水女子大, 2007年8月29～8月30日
- 29) パネリストとして報告 “Corporeal Expression in Performance Works by *Gekidan TAIHEN*: Questioning the Body as a Modern Institution”, パネルのテーマ: “Questioning

- the Modern Body: Toward New Understandings of Self, Other, Gender and Ability in Japan and Korea.” 第13回国際パフォーマンス研究学会 (PSi #13), PSi #13のメインテーマ “Happening/Performance/Event.” アメリカ, ニューヨーク大学 (NYU), 2007年11月7日～11月11日
- 30) “Feminist Aesthetics in Kishida Rio’s Theatre Texts: On *Shintokumaru* (Poison Boy) and *Ito Jigoku* (Thread Hell),” at the International Conference on ‘Body Spaces: Corporeal Topographies in Literature, Theatre, Dance, and Visual Arts,’ the University of British Columbia (UBC), 2008年3月14日～3月16日
- 31) 『ディクテ』公演とシンポジウム「他者の言語, 異境の身体『ディクテ』上演をめぐる」パネリスト: 西成彦+池内靖子+チョン・ヨンドウ+高山明+松田正隆+八角聡仁 京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター主催, 京都造形芸術大学, 2008年9月21日
- 32) 「パフォーマンスにおける身体・映像・言語—琴仙姫の作品を中心に」日本演劇学会近現代演劇研究会京都集会, 京都府立文化会館, 2010年3月21日
- 33) 国際演劇研究学会 (IFTR) パネル報告 (単独) “The Powers of Mourning and Violence in the Works of Performance by Soni Kum,” in a Working Group Open Panel/Feminist Research: “Uncomfortable Attachments: Mourning, Memory Anger and Bare Life.” 大阪大学, 2011年8月11日
- 34) シンポジウム報告 (ゲスト・スピーカー) “The Work of Three Women Artists: Korean Diaspora and the Politics of Translation,” Symposium on “*Imagine — micro strategies and visions in contemporary art.*” デンマークの美術館, The Aarhus Art Building-Centre for Contemporary Art, 2011年11月3日
- 35) シンポジウム報告 (ゲスト・スピーカー) “Rethinking the Genderdized/Normalized/Nationalized Body: On Corporeal Expression in Butoh and Kim Manri’s Performance Troupe *Gekidan Taihen.*” Symposium on Japan in the 1960s, “Understanding Japan’s Dynamic Decade”, オーストラリア, メルボルン大学, 2011年12月15～17日

#### 4. 社会貢献活動その他

NPO 法人京都自由大学講師

日本軍「慰安婦」歴史館後援会共同代表